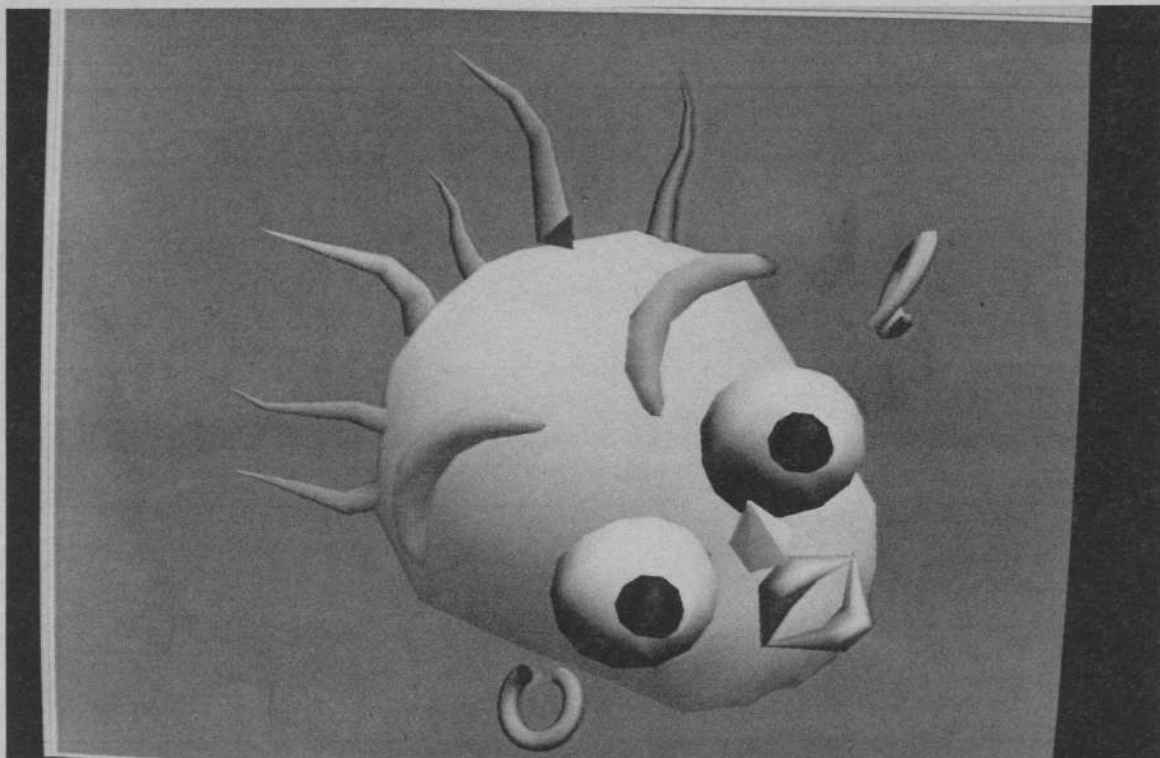
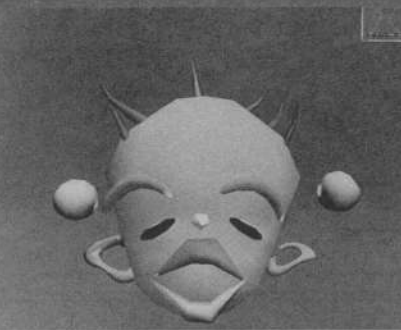


「シリコン族」が

人とコンピュータの近未来のパイプ役？



電脳ベット「ニューロベビー」。人の声に合わせて表情を変える。放っておくと、あくびをしたりする(写真下・中央)。なお、9月29日、東京国際美術館(多摩市)で仮想生物の展示会が開催される。



のほか、音声認識、リアルタイム画像生成など、最新の仮想現実技術が投入されている。開発の目標は人とコンピュータとのヒューマン・インターフェイスの確立。「仮想生物をエージェント(代理人)にして、人がコンピュータを使えるようにしたい。その場合、仮想生物は賢いだけではダメ。人と感情レベルのコミュニケーションができないといけないんです」(同社、村上公一・第二研究室長)

将来のパソコンは、このようなマン・マシン・インターフェイスの部分に能力の9割以上を使うようになるだろうと、研究室では予測している。でも、そうなのは、早くても今世紀末。現時点では、開発費2億5千万円、ワークステーション7台使用という大システムになる。

ただし、「電脳ベット」としてなら、すぐにも登場しそう。アーチストで総合電子専門学校・講師の土佐尚子さんは同研究室と共同で、「ニューロベビー」というシステムを開発している。

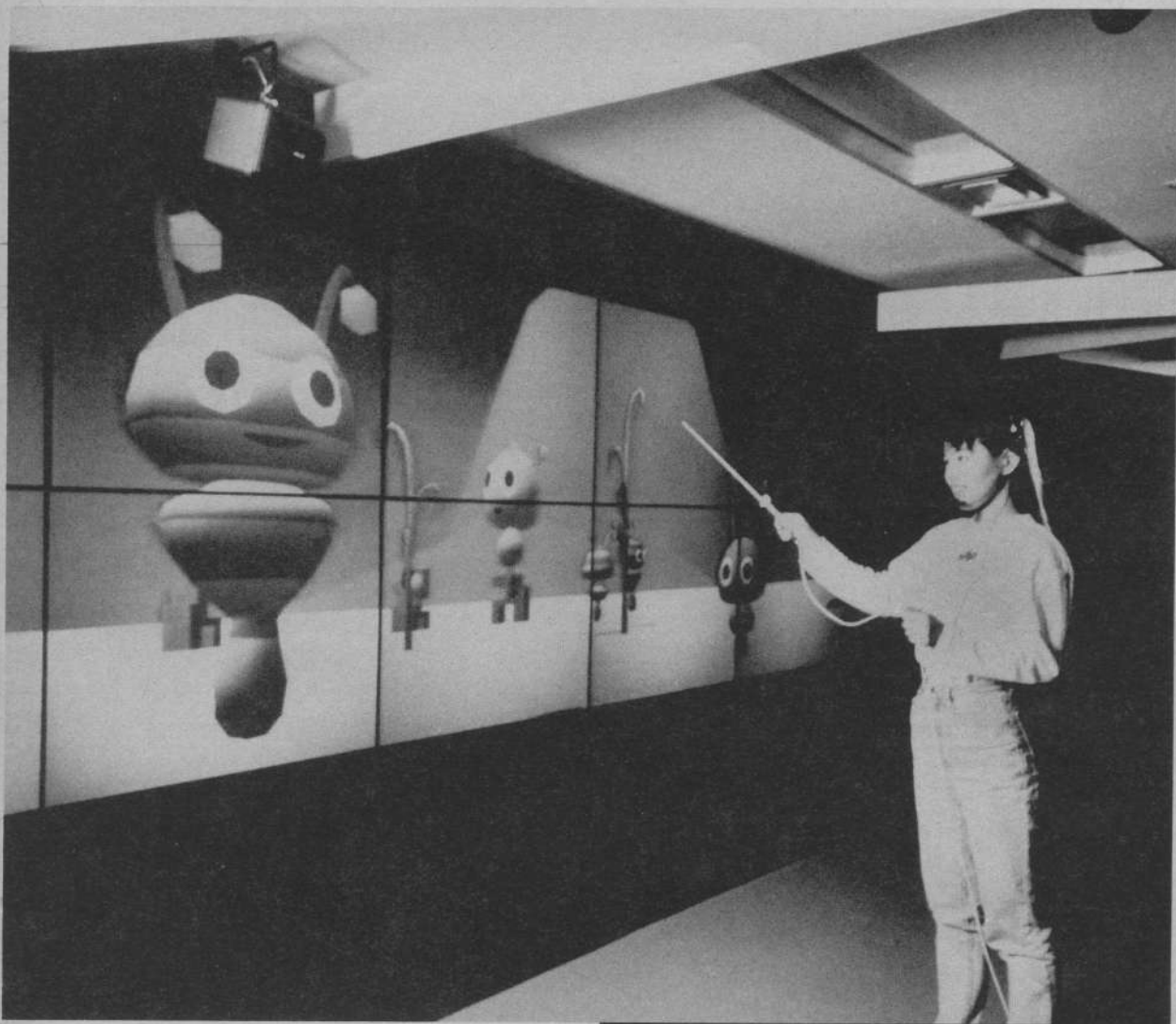
人が「よしよし」と話しかければCGの赤ん坊が楽しそうな表情をし、「こらこら」と言うと怒った顔をする。学習機能のあるニューロコンピュータを使用、人の声の波形から喜怒哀楽の感情を分析、それに合わせて表情を変えるのである。

キャラクターやニューロコンピュータの学習内容を変えれば、「ニューロベビー」は自分好みのベットにすることが可能だ。「家庭用ゲーム機用の電脳ベットのソフトを作りたい」と土佐さんは言う。「シリコン族」とあなたはうまくつきあえそう？

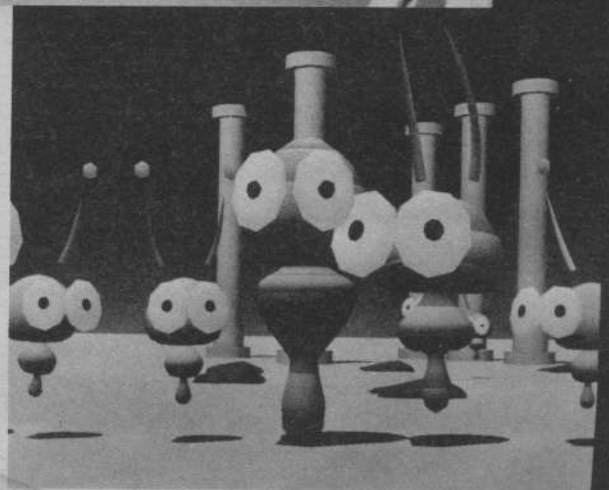
写真/富士通研究所、尾崎照夫

産声をあげた

感情を持ち、人の感情がわかる「仮想生物」



仮想生物「シャルロット」。指揮棒を振ると合唱したり、おどかさず目を丸くするなど、人とインターラクティブ(双方向的)なシステム



生物学者の畑中正一氏の言葉を借りれば、地球上の生物はみな炭素でできた「炭素族」だ。これに対して、シリコン・チップを母胎とする新しい生物「シリコン族」が今、誕生しつつある。

富士通研究所にあるコンピュータには2家族10人の仮想生物「シャルロット」が住んでいる。活発に動き回る子供、父親べったりの子供というように「個性」があるほか、疑似的な「感情」も持つ。

人とのコミュニケーションも可能で、「みんな集まれ」と人が呼びかけると近づいてくる。「ワッ」とおどかすと、父親は目をつりあげて怒り、子供はおびえて親の陰に隠れる。磁気センサーつきの指揮棒を振れば、合唱をはじめめる。

システムには、行動決定アルゴリズム